

自彊前進

NO. 6 平成28年8月25日(木)

附属新潟中学校 学校だより

※ 自彊前進…自ら努め励み、前に進むこと (校歌3番の詞から)

2学期始業式 校長講話

校長 柳沼 宏寿

夏休みが終わり、今日からいよいよ2学期が始まりました。今年は猛暑が続きましたが、皆さんは有意義な夏休みを過ごすことができたでしょうか。まずは、今ここに皆さんと元気で再会できていることを大変うれしく思います。中体連・音楽祭等で北信越大会そして県大会に参加した方々も暑い中よく健闘してくれました。先週NHK全国学校音楽コンクール県大会で銅賞に輝いた音楽部をはじめとして、皆さんが勉強や行事などに時間を取られながらも限られた中で非常に高いレベルの成果をあげてきたことに対して、心より敬意を表したいと思います。本当にお疲れさまでした。

今年の夏は、高校野球に加えて四年に一度のオリンピックが重なりました。日本人の数々の快挙に心踊らされた人も多かったのではないのでしょうか。個人的には、体操の内村選手が金メダルを獲得した時に海外記者の批判に対し逆転されたウクライナの選手がそれを否定した態度であるとか、女子5000m予選で接触し転倒した二人の選手が互いを助け合いながら最後まで走り抜いた姿。さらに、勝っても負けてもダンスを踊って自国の現状をアピールしようとしたキリバスの重量挙げの選手など、勝敗を超えた選手の人間性にも心打たれた大会でした。スポーツを通じた異文化との交流には、国や民族という見えない垣根を越える何かがあるような気がします。

そのような中で柔道の競技ではエジプトの選手がイスラエル選手との握手を拒否した出来事がありました。国家的な摩擦を個人が抱えることはとても残念なことです。世界情勢を振りかえると、米ソの冷戦構造が終結し、またベルリンの壁が崩壊するという歴史の大きな変革を経て、個々の民族や国々が本来の自由を手に入れてきたはずでした。しかしながら、現実には世界中で紛争やテロが頻発する事態に至っており、一言で「グローバル社会」といっても、簡単に実現するものではないことを思い知らされます。ますます多様化が進む社会において、異なる立場・考え方をどのように折り合いを付ければ良いのでしょうか。

近年の学術研究において「共感性」という概念が重視されてきています。「共感」とは、文字通り「相手の感情や喜怒哀楽を理解し、感じ、共有すること」を意味します。決して目新しい概念ではないのですが、「多文化共生」を目指すことが極めて困難であるという現実に直面して、人間にとっての「共感性」を科学的に明らかにする必要性が生じてきたのだと思います。進化論を提唱したダーウィンも、「共感」について「社会的本能の最も重要な一要素として自然淘汰によって発達した」と、人間独自に高まってきた能力であることを説いています。人類の歴史を紐解けば、人間社会に高い共感能力が見出された象徴的な出来事として、例えば、約30万年から10万年前のネアンデルタール人が、死者の埋葬時に花粉を撒いていたことが挙げられるでしょう。そこには宗教的な精神性の芽生えが感じられます。また、3万年前ぐらいのクロマニヨン人になるとラスコーやアルタミラの洞窟の壁画が描かれ始まりますが、ほぼ同じ頃に言葉が発明されたと言われています。このような事例からも、個人と個人の心をつなぐ「共感性」が社会形成の基盤にあり、高度な精神としての「文化」を創造してきたことがわかります。

この「共感性」に関わって、アメリカの社会心理学者ニューカム (Newcomb, T. M.) は、他者を正確に判断することのできる人の特徴として次の五つをあげています。まず一つ目に「熟達」(人間的に成長していること)。二つ目に「知能」(観察から推論し、それを説明する能力があること)。三つ目に「内面感受性」(相手に対し受容的であると同時に自主独立した判断を持っていること)。四つ目に「非権威主義」(弱者の立場に目を向けることができること)。

最後に「自己洞察」(自分を客観視できること)です。

さて、先ほどの握手を拒否したエジプトの選手ですが、彼の行動をこれらの特徴と比較してみると、どれも当てはまってこないことがわかります。自分の中の閉じられた枠組みでしか世の中と交流しない。つまり共感性が欠如しているということです。その結果、この選手はオリンピックの「友好の精神に反する」ものとみなされ帰国処分を受けてしまうわけです。しかしながら、この選手には、私たちには到底推し量ることのできない背景があることも確かでしょう。したがって「友好の精神」を具現化するのはむしろここからで、彼の心情や、その背後にある国の思惑をどう受容していけるのかが課題になってくると思います。

ところで、ニューカムの挙げた五項目を見て、私はすぐに本校の教育目標や生徒会のスローガンと多く重なっていることに気づきました。附属中学校の教育目標は「生き方を求めて学ぶ生徒」ですが、その重点目標は「自らを考え行動する」「考えを吟味し判断する」「他者を尊重し協調する」「よりよいものを創造していく」というものです。さらに生徒会のスローガンは「自主独立・協同」です。いかがでしょうか。本校は、普通の授業をはじめ様々な行事や活動を通して、まさに「共感性」を尊重した学びを追求していることがわかります。皆さんの日々の一つ一つの学びは、皆さん自身にとってかけがえのない一歩であると同時に、グローバル社会へ向けた世界の最重要課題にしっかりとアプローチしてきているということです。

2学期は、演劇発表会、音楽のつどい、そして全国の先生方をお招きする教育研究発表会、その他行事が目白押しです。もちろん3年生にとっては高校進学という人生の大きな関門も迫ってくる時期です。まさに荒波の大海を航海するかのようですね。まずは、自分の目標を明確にイメージしてください。そして、個性豊かな仲間とお互いの持ち味を活かし合い、助け合いながら、前進して行ってほしいと思います。それぞれが自己実現に向かってしっかりと舵を取ってくれるものと信じ、また、期待しています。

夏休み中の附属新潟中生徒の活躍

新潟県総合体育大会 (7月25日, 26日 県内各会場)

陸上競技	内山 凜太郎 (3年)	砲丸投	出場		
	齋藤 なな (2年)	100MH	7位		
水泳	峯木 結宇 (2年)	400M自	8位	200M背	9位
	高橋 実希 (1年)	100M平	6位	200M平	6位

剣道	伊藤 敬子 (1年)	2回戦進出			
相撲	波多野雄真 (1年)	軽量級	優勝		【北信越大会出場】

北信越競技大会 (8月3日 富山県射水市)

相撲	波多野雄真 (1年)	軽量級	初戦惜敗		
----	------------	-----	------	--	--

NHK全国学校音楽コンクール

下越地区大会	(7月29日 新潟テルサ)	金賞【県大会出場】		
県大会	(8月17日 新潟市民芸術文化会館)	銅賞		
	(9月3日10:00~	NHK・Eテレで放送予定)		

新潟市中学校英語発表会 (8月17日 白根学習館ホール)

中村 紫音 (3年)	Holding on to feelings like a rice ball with something special inside.			
------------	------------------------------------------------------------------------	--	--	--

県数学選手権中学生大会 (8月20日 BSN本社)

団体の部	優勝	松平 宗大 (3年), 長橋龍ノ介 (3年)		
個人の部	準優勝	山田諒太郎 (3年)		

北信越国民体育大会 (8月21日 長野県)

アーチェリー	中西 雅 (3年)	出場		
--------	-----------	----	--	--